SNS問題と「裏文化」・「闇文化」について

（塩崎造語、2018・11・12全生研ML より）

河合靖久

全国生活指導研究協議会（全生研）のメーリングリスト、塩崎さん（塩ちゃんマン）のブログの「裏文化」と「闇文化」についての要点を紹介する。

過保護の子が、ひ弱で「温室育ち…」と言われたり、O157の蔓延時に「無菌状態が感染を拡大した…」。このことは、いじめや道徳を考える際の視点の一つとならないかと考える。

すなわち、「子どもの人格形成は、学校教育をメインにした表（おもて）の関係・指導だけでまっすぐになされるだけではない。子ども同士の未成熟な仲間と形成するいわゆる「裏文化」の中で、失敗や反省、無謀なチャレンジや後悔、誤魔化しや裏切り、反抗や茶化し…、そういったブラックな空間をもくぐりながら成熟した人格を形成していく…」（これまでの）「大人はそんな子どもたちの「裏文化」を苦笑しつつ保障し、子どもたちの成長を見守ってきたのではないか…」との提起だ。さらに、「学校教育の場面では、ルールやマナー、気遣いや連帯と共同、そして自治などを、当然のこととして支援・指導してきたが、2000年前後から大人社会は子ども社会に不当に介入するようになった。表の指導に、管理と競争が強く持ち込まれ、国が決めた規格に当てはまらない子どもたちがあぶり出され、子どもたちの関係にも、排除と迫害が生まれ、子どもたちは「安心できない〝安心空間〟」を作り自分を守るようになった。」という。

世間的には「本音と建前の使い分け」とか、「清・濁併せ持つ」だとか言われてきたが、学校の教育の場面では、物事の裏表、特に「裏」に関した指導は軽視、または無視して進められてきたように思う。

実際に、教職員の多くは、経済的にはともかく、知

的環境に恵まれ、真面目に正直で「いい子」として育ってきたのではないだろうか。日常的には、本音を抑え、教科書的な建て前での指導が先行してはいないか。

しかも、近年学校教育の「表の指導」に、「一斉一律・競争（国家主義・新自由主義）」が持ち込まれた結果、（学校・教職員も一丸となって…）子どもたちを「排除・遅れへの不安」と「とてつもない孤独感」を持つ方向に傾斜したのではないか。「不安と孤独感、そして（押し付けられる）大人の正義への反発は、裏文化よりもさらに秘密裏に、そしてさらに残酷な『闇文化』を形成した」、との分析だ。

もちろん、基礎的な国民教養としての知識・技能や、社会性の交流の基になるルールやマナーを教え体験する小社会空間としての学校は、学校教育の基本的機能には違いがない。「全生研」は、仲間に対する気遣いや連帯と共同、そして自治などを身に着けるために支援・指導を強調してきた研究協議会でもある。

しかし、大人社会の建て前と別に隠れた裏文化（親密な関係での、秘密を伴い大人に言えない遊びや仮想の残酷・不道徳など）を知った上での指導も必要となるのではないか。裏文化の中でこそ育つ人間力も無視できない。（残酷な言葉を含む童歌や昔話等の有意性…）

その子の生育歴や家庭環境を重視することと同時に、頭の隅に置いてもいいのではないだろうか。

裏文化の抑え込みが、やがて「誹謗中傷、排除と迫害、いじめ、殺人、孤独と自死」を招く『闇文化』を蔓延させる。この闇文化は、大人が干渉できないような巧妙な関係が作られ、仲間を排除・迫害し、傷つけ合うことで自分の存在を確認したり仲間を増やそうとしている…（闇文化の検証については、不十分だが、付記を参照）。子どもたちのＳＮＳ問題は、単なるネットマナーやルールの問題ではないとの警告である。

付記：ＳＮＳ問題として、他のブログに八項目があった。①個人情報の流出。②アカウント情報の乗っ取り。③炎上。④いじめ。⑤晒し。⑥なりすまし。⑦ソーシャルハラスメント（フェスブックの実名利用）⑧フェークニュース（未確認情報、虚偽報道）。

さらに、依存症などの問題も大きいと思う。

（かわい　やすひさ・所員）